
ひぐらしのなく頃に 心祝い編

ルシフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に 心祝い編

【Nコード】

N0218W

【作者名】

ルシフェル

【あらすじ】

惨劇を乗り越えた雛見沢の部活メンバー

そして今日ある人物が退院したためパーティー開くことになって…

（前書き）

どうもルシフェルです

短編短編6作目です

今回はひぐらしですね
ではどうぞー

昭和〇〇年――

「本当にありがとうございました」

「いえいえ、本当に退院できてよかったですね」

ある病院の中から1人の医者と1人の少年が出てきた。

「先生のおかげです」

「何言ってるんですか。病気に打ち勝ち、リハビリもがんばった悟史君自身のおかげですよ」

1人の少年の名は北条悟史。

雛見沢村の惨劇に巻き込まれ、病院生活を送っていた彼が今退院した。

「……にー…にー…」

「ほら、向こうの方で皆さん待ってますよ」

ここの先生、入江京介が見つめる先にはたくさんの少年少女達がいた。

「はい！」

それを自分の目で確かめた悟史は元気良く返事をし、先生と別れの挨拶をすませる。

そして悟史は皆の元へまだ本調子でない体で駆けて行く。
惨劇を回避した仲間^{ともだち}の元へ。

「おかえり」

「おかえりなさい」

「おかえりなさいです」

「おかえりなさいなのですよ」

「おかえりっ」

「おかえりさない、悟史君」

「おかえりさない……にーにー」

「ただいま、皆」

ここに運命に抗い、乗り越えたメンバーが揃った。

そして新たな日々が始まる！

病院から歩いてしばらくの場所で悟史を含めた部活メンバーはとても楽しそうに歩いていた。

事件も解決し、悟史が病院を退院したのだから、テンションも上がるというものである。

圭一と悟史が顔を合わせたのは今日が初めてだが、2人の人柄や他のメンバーの後押しなどもありすぐに打ち解け仲良くなっていた。

そんな折、圭一がこんなことを言い出した。

「よし、退院祝いをしようぜ！」

部活メンバーは一瞬きよとなるもすぐに思考を回復し、皆賛同してきた。

「いいね、圭ちゃん。盛大にやろー！」

とくに魅音はノリノリで賛成していた。

「じゃあ、どこでやる？」

「やっぱり、梨花ちゃんの家か？」

「みい、私達のところだと狭いのです」

「圭一君のところは？」

「俺のところはダメだな。親の仕事の関係上あまりうるさくできねえ。そういう、レナのところは？」

「私のところも……」

やることは決まったもののどこの家も何らかの事情があったりと無理だと言っ声ばかりが上がった。

「そうですわ」

と先ほどまでんぐと考えていた沙都子は何か閃いたようだ。

「私の家でやったらいいんですわ」

「だから、リ……」

沙都子の発言に圭一は何か言おうとしたが、そこであることが気づいた。

他の皆も同じように浮かんでいた。

「「あそこか（ね）！」」

考えが一つに纏まったメンバーはある一軒家に来ていた。

「しかし、来たのはいいけど…本当によかったのですか？沙都子や悟史にとってはあまり良い思い出ないんだろ？」

圭一は着いて早々沙都子や悟史に聞く。

2人はちよつとばかり暗くなつた気がしたが沙都子が話しかけてきた。

「大丈夫ですわよ。昔のことですし。今はいませんもの。ね、にいいー」

「そうだね。昔はちよつと色々あつたけど、今は平気だよ。それに

やっぱりここが自分の家だから」

言い出しこそ少し悲しそうであったが、最後の方では2人は笑顔になっていた。

それを聞いた圭一は「そうか」と笑顔で返事した。

「じゃあ、入るのですよ」

「わー、わくわくなのです」

圭一の問いを終えると、気を使ってか梨花が率先として入っていく。

同じく羽入も嬉しそうに一緒に入っていく。

そして他のメンバーもぞろぞろと入っていった。

「うん。ちょっと埃っぽいけど、大丈夫だね。」

「掃除はした方がいいんじゃないかしら？」

「そうだね。じゃあ昼間に掃除して、夜にパーティーしようか。」

魅音、詩音、そしてレナは家の状態を確かめると今度は掃除すると言いつ出す。

それを聞いた他のメンバーも耳を傾ける。

「じゃあ、後分担を決めようぞ」

そして圭一の提案により、それぞれの掃除の分担を決めて掃除を始めた。

「皆、おやつを持ってきたから一旦休憩しよう」

時間は八つ時ころ。

掃除を始めて1時間ほどだが、おやつの間だったこともあり魅音と詩音がお盆の上におはぎを乗せて、それをリビングの机の上に乗せた。

そしてその声を聞いて他のメンバーも掃除を一時中断して集まってきた。

「おお、今日はおはぎか……中に針なんか入ってないよな？」

「ハハハ、やだな圭ちゃん。入っているわけじゃないじゃん」

料理を見て心配そうだった圭一だが魅音に背中を叩かれながら否定された。

「いてて。…そうか、じゃあ…」

「でもまだ食べたらずメなんだな」

魅音に言われて安心しておはぎを食べようとするが、手を伸ばした瞬間におはぎの乗せたお盆ごと取り上げられた。

「何かあるのですか？」

それを見て羽入は首を傾げる。

「ふふふ、これはゲームなんだよねえ」

「ゲームってことは部活の延長戦ってことよろしいのです？」

「そういうこと。じゃあ私がルール説明するわね」

これが部活動の延長戦、ゲームだということがわかり全員が気合を入れていた。

そして詩音がルールを説明するが、要するにロシアンルーレットであった。

しかしこれはただのロシアンルーレットではなくさらに過酷な罰ゲームがあった。

「罰ゲームは……」

といつの間にか説明役が変わっていた魅音がわざと間を空けてそれをメンバーに見せびらかした。

「じゃーん！ このどれかを着て食材を買い物だよ！ しかも二人

」

そうそこにはメイドやら水着などいつもながらどこから持ってきたのかわからないコスプレばりの衣装であった。

「はうゝ。これを着た圭一君と悟史君かぁいいよゝ」

それを見たレナはいつも通りお持ち帰りモードに変わっていた。

「くっ、これを着て買い物はきつい……そっぴゃおはぎの中はなんなんだ？ ロシアンルーレットなんだから違うやつが入ってるんだろ？」

圭一は罰ゲームの内容を聞いて苦い顔になりながらも本来の罰ゲームである中身を聞いた。

「えつとですね。わさび、からし、七味、唐辛子。あとはハバネロですね」

「……これまた辛いもののオンパレードだな」

詩音は中身を一つ一つ挙げていくがそれを聞いたのが間違いだつたと圭一はげんなりしてしまった。

「あうあう、辛いものは苦手なのです」

「これはなんとしても勝たないといけませんわね。ねっ、にーにー」
「そうだね」

他のメンバーもとても辛いもの＋コスプレ買い物の二段地獄が待っているため先ほどよりさらに気合が入っていた。

「じゃあジャンケンで順番を決めるよ、最初はグー、ジャンケン…」

そしてジャンケンで決まった食べる順は魅音↓レナ↓悟史↓梨花↓詩音↓沙都子↓羽入↓圭一となった。

「ぐおおおお！ 俺の右手のチヨキが負けるだつ！ くっ、こ、こんなはずで……」

「はいはい。負け惜しみはいいから早速いくよ」

変に叫んでいる圭一をほっておいて魅音は適当に選んだおはぎをひょいっと口の中に入れる。

一番手とあつてか余裕綽々としている。

しかし圭一を除く他のメンバーはその様子を固唾を吞んで見守っている。

「……うん、おいしいよ。大丈夫だね」

それを聞いて一安心するメンバー一同。

「じゃあ次はレナだね。…じゃあこれ」

これまたレナはおはぎを適当に掴み食べた。

その間にもまた緊張感が漂う。

「とてもおいしかったよ」

レナもまた大丈夫なようで今度は悟史がおはぎを掴んで食べ始める。

「僕はこれで。………うつ」

悟史がおはぎをかんだ瞬間、悟史は台所に駆け込んでいった。台所からは水の音がしている。

「あちゃー、悟史君が一人目の犠牲者か。じゃあ次梨花ちゃん」

「みい。がんばるですよ」

そついつと梨花も一つおはぎを手にし、食べ始める。

「おいしいですよ。にぱー」

「じゃあ次——」

とその後詩音、沙都子と順に食べたが両方とも当たらなかった。

「じゃあ次は羽入だね。あと羽入が選ばなかった方が圭ちゃんになるから」

「うっ、辛いものに当たらないようになるのですっ！」

順が回ってきた羽入は自分も神なのに神頼みをしていた。同じように圭も羽入が当たるようにと拝んでいた。

「えっ……と、えっと。こっちなのです！」

少し悩んでいたが一つ掴むと勢いよく食べた。

「……おいしいです！よかったのです！」

「チクシヨオオオ!!」

この瞬間羽入は天国、圭一は地獄が確定したのであった。

「おっほほ、圭一さんが敗者ですわね。あつ、圭一さんのおはぎが残ってましてよ」

「いやいや、もう確定しているんだから食わないでもいいだろう？な？」

沙都子が高らかに笑いながら一つ残っている激辛おはぎを薦めてきた。

もちろん圭一はそれを理由をつけて拒否するが……

「いや、おはぎを全員食べないといけないルールだから食べないとダメだねえ」

「はい、圭一君どうぞ」

「一人だけずるいですよ」

「えっちょ……ギャアアア!!」

と他のメンバーが許してもらえるはずもなく無理やり食わされ、辛さに絶叫するのであった。

そしてさらに罰ゲームとして圭一と悟史はコスプレをさせられてそのまま買い物に行かされるのであった。

そしてその夜

掃除を終え、パーティーの準備を整えたメンバーは北条家に集まっていた。

目の前には美味しそうな料理の数々。

部屋には派手ではないもののある程度飾られており、これからパーティーが始まるという高揚感に満ち溢れていた。

「じゃあ、パーティーを始めるよ！」

「「イエーイ！！」」

そしてパーティーが始まった。

司会はこういうイベントが好きな魅音で、他のメンバーもテンションは上がっていた。

パーティーもメンバーの人柄、性格、そしてテンションのおかげで順調に進んでいく。

とは言っても所詮は子供のパーティーなので料理を食べたり、お話をしたり、借りてきたカラオケマシーンで歌ったりだったのだがとても楽しいひと時を過ごしている。

カラオケの時に『You』を歌っていたのに何か違和感的なものを感じていた気がするが気のせいだろう。

そしてパーティーも終盤に差し掛かった頃。

「じゃあ次は退院祝いのプレゼント！」

魅音は高らかに宣言すると自分のあげるプレゼントを持ってくるため少し奥に引っ込んだ。

悟史以外のメンバーもそれを聞いて各々のあげるプレゼントを取りに行く。

悟史一人はこれには想定外だったらしく戸惑っている。

その間にも悟史以外のメンバーは戻ってきた。

「じゃあまずおじさんからいくよ。はいこれ」

とまず魅音がプレゼントを差し出してきた。
今でも少しあたふたしている悟史だが、差し出されたので反射的に受け取ってしまった。

そして魅音に開けるようせかされたため手のひらに乗ったそこま
で大きくない箱を開けると…

「腕時計…」

「いや、おじさん悟史君がほしいものがわからなくてねえ。だからこういうのになっちゃったんだけど……いらなかった？」

「いやそんなことないよ。ありがとう、魅音」

魅音のプレゼントをもらって笑顔になる悟史。

「今度は俺だぜ、はいよ」

と圭一もプレゼントを渡した。

そしてそれを受け取った悟史は開ける。

「服…、服はあまりなかったからありがとう」

「安もので趣味が違うかもしれないが、喜んでくれたなら良かったぜ」

これまた嬉しそうに悟史は笑っていた。

次はレナがプレゼントを渡す。

そしてその中身は……

「わぁ、クッキーだ」

「手作りなんだ。良かったら食べてね。もちろん皆の分も作ってるから食べてみてね」

それを聞いてメンバーもとても喜んでいた。

悟史の方は早速とばかりにクッキーを頬張り、とても美味しそうに食べている。

「じゃあ次は私ね。私は……じゃーん。お揃いの名前入りストラップ」
詩音が出したのは某リラックスしたクマのようなキャラクターに
名前が刺繍されたストラップだった。

それも二つのストラップにそれぞれ『しおん』と『さとし』と書
かれており、お揃いとなっていた。

「始めは『プレゼントは私』ってしようと思ってたんですけど、お
ねえに怒られちゃって」

「当たり前だ！」

その光景に悟史は苦笑しながら見守っていた。

「ちょっと悟史君来てくれませんか？」

詩音がボケるのを止めると今度は悟史を奥の部屋にある用事のた
め引っ張りだそうとする。

次のプレゼントを渡す梨花、沙都子、羽入共々、他のメンバーも
不思議がっていたが、魅音のみは理由を知っているようでニヤ
ニヤとしているのだった。

そのまま悟史は詩音に連れられある部屋に案内される。

そしてそこにある物が置いてあった。

「これは……あ、ありがとう。ずっと持っていてくれたんだね」

「うん。でもこれをここまで持ってきたのおねえと一緒にだっただけだね」

これを見て悟史は感謝と共に泣き出しそうになるが他の皆に怪しまれないようにするため涙を拭き、そこを後にするのだった。

そして元の部屋に戻ってきた二人は最後のプレゼントをあげる人、梨花、沙都子、羽入が待ち構えていた。

「私達はこれですわ」

沙都子は少し照れながら悟史に渡す。

「開けるね」

そういつと丁寧に包んだプレゼントを開ける。

「これは…？」

「ボクのお父さんのお古の着物を沙都子と羽入が悟史用の作務衣さむえに直したのですよ。悟史がもっと家でくつろげるようになって……」

悟史の質問に梨花は説明してくれた。

「むう……」

そして今沙都子達の気持ちが大きく伝わる。

（僕はなんて幸せなんだ…）

よく見ると人差し指を絆創膏で張っており、慣れない手つきで縫っていたのがわかる。

それを見て、それを知って、それを感じて悟史はついに涙腺を崩壊して泣いてしまう。

もちろん他の皆の感謝の気持ちもあったのであろう。

誰も信じられない時期があった。

苦痛で生きている自体が苦痛であった。

それでも今生きている！
実感できる。

もしかしたら昔より今の方が幸せを感じているかもしれない。

いや感じているのであろう。

だって仲間ともだちがいるのだから……

信頼——絆——のある人たちなんだから。

しばらく悟史は泣いていた……。

「じゃあ沙都子、今度は僕の番だ」

「え？」

沙都子は驚いていた。

先ほどまで嬉し泣きをしていた悟史から、まさか今度は自分がもらえるとは思ってもいなかったからだ。

もちおん魅音、詩音を除くほかのメンバーもこれには驚きだった。

サプライズは自分たちだけとそう思っていたからだ。

暫く置くに引っ込んでいた悟史だがプレゼントを持って戻ってきた。

それも想像より大きいプレゼント。

「はい。これが僕からのプレゼント」

悟史が持ってきたプレゼントというのは――

――クマのぬいぐるみであった。

そう沙都子の誕生日に渡せなかったあの大きなぬいぐるみであった。

「。年越しの……しかも誕生日じゃないけど……受け取ってもらえるかな？」

「うっ、はいですわ……」

沙都子がそれを受け取った時これまた沙都子は泣いてしまった。

『良かった』と。

それを改めて実感した瞬間であった。

そして悟史もまたつられて同じように泣いてしまう。

他のメンバーももらい泣きしているもの、涙を拭いているもの、包み隠さず大泣きするもの、照れで涙を見せないようにするため顔を背けるもの。

でもそこには確かな暖かさがあった。

惨劇を乗り越えたもの達の褒美である日々の暖かさ。
それを実感しうるその時を今日は一際感じさせる日であった。

そして今日も雛見沢村では平和な日常が続くのであった。

（後書き）

どうでしたか？

ひぐらしなんて惨劇の方が日常か迷いましたが最終的に日常になりましたw

まあ自分に新しい惨劇なんて考えられませんw
仕方ないので日常編に…

僕日常系好きだな、おいwww

でも自分なりにがんばりましたので感想・評価・誤字等お願いします

P・S

長編の方もよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0218w/>

ひぐらしのなく頃に 心祝い編

2011年10月8日04時54分発行